

何かが起きている。行事、出来事、現象。これは質問をしたくなる。

何を意味するのだろうか？ 出来事の釈明に導かれる。出来事。質問。釈明。

出来事：約120人のイエスに従う人々が、過越祭後の50日目にエルサレムの2階屋に集まっていた。そして復活されたイエス。彼らは今だエルサレムにいた。それはもう一つの祭（五旬祭ごじゅんさい—収穫祭）の時であり、都は天下のあらゆる国からの巡礼者で満ちていた。祈りを共に捧げ、イエスを信じる人々は待っていた。復活されたイエスが御国へ昇られる前に、聖霊が降臨するまで待つようにと彼らに指示をされていた。

そして起きる—あることが起きる、それを言葉にするには難しい—『激しい風の音、聖霊が文字どおり彼らの間を吹き抜けた。炎のような舌が現れ、一同は聖霊に満たされた。人々は語り、歌い始め、全能の神のみ業を詳しく語り始めた』（使徒言行録2:2）。天と地のすべての作り主、すべての命の源であり起源である神、エジプトで奴隷であった人々を救い出され、バビロンへ逃れさせられた。その主は世にその子を遣わされた。その子は、病を癒され、盲目の人に光を取り戻され、罪を許され、失った尊厳を回復され、真理の力（そしてその代価も）を語られ、死から再び復活すると語られた。

それは真に大騒ぎになったのは違いない。特に朝の最初のことであり—群衆が集まり始め—風の音と人々が一齐に語り始め、通りに溢れる人々、全く見知らぬ人々、外国人が都に集まり、自分の国の言葉で話しだした。それは質問を促す。何を意味するのだろうか？ 彼らは酔っているのか？ 気は確かなのか？ 何がそうさせるのか？

ペテロは立上がって話し始めた。全く異なる時代と状況であるが、古代の予言者からの言葉を引き出した。しかし言葉はより深く、より普遍的に聞こえた。その意味とは『神は言われる。終わりの時に、わたしの霊のすべてを人に注ぐ…』。男も女も、老人も青年も、奴隷も自由人も。すべての人々、すべての人類に。終わりの時に、究極的には、神の霊、神の命は私たちのためにある。すべての人々に。選ばれただけでなく、すべての人々が祝福されるために選ばれた。従って、すべての人は自分自身を見極めるだろう。そして自分自身が、すべての民族、言葉、人種、国を越え、神の人々、神の子供は、霊において一つであることを知るであろう。

従って、すべての人、主の名を呼ぶ者は、みな救われるであろう。

救われる—救出される (rescued)、回復させる (restored)、救済される (redeemed)、修復される (made whole)、許される (forgiven)。どんな恐れであっても、もう恐れる事はない。

なぜなら神の霊、神聖な命の息吹きは、すべての人のためにあるからだ。すべての人は、神聖な命のダンスに招かれている。それは世のすべての人が含まれ、すべての人のために席が用意されている。共同社会の愛である。

使徒言行録最初の章に、初代教会の牧歌的な絵が描かれている。私たちは尋ねたくなる。何が間違ったのか？ なぜこのような状況が続かないのか？ 人々は互いに愛し合って、共有物を互いに分け与えていた。多くを所有する者は、少ない所有者に分け与えていた。それは各々の能力や、各々の必要性に応じていた。

私が若い頃、英国のDevonにあるLee Abbey（リー大寺院）の夏期キャンプに参加した。キャンプを運営する30人も含んで、16歳から25歳の約120人のキャンパーがいた。キャンパーの年齢はほぼ同じであった。私や多くの人がキャンプに魅力され、再参加し続けたのは、夏のこの2週間が、初代教会のような生活を過ごし、経験できたからである。到着した時の暖い歓迎、それはすべての人を受け入れる愛を感じさせるものであった。恐れや不安を払いのけ、安心できる所であった。楽しさ、笑い、陽気さ、教え、礼拝、歌、オートミール、よい雰囲気、活気があった。どうして教会はこのようではないのか？ どうしてこのようなことが常ではないのか？

キャンプ最終の夜に捧げられた聖餐式は、“山頂の経験”を思い起こさせるものであった。私たちが帰ってゆく教会は、必ずしも同じでようでない心と準備をしたのだった。私たちが現実の日々の生活に戻った時、大半は堅くて古い英国聖公会に属していたが、キャンプでの経験は、何ヶ月先にも渡って私たちの栄養となり力となったのを知った。キャンプ生活では、私たちがどのように霊の生活に対処するかを描いてくれた。すべてを取り去った時、実際の教会はどんなものであるかを描いてくれた。すべての人々への愛と包容、受け入れと許し、平和と正義を描いてくれた。

それがペンテコス（聖霊降臨）の日に私が感じる所である。

それは実際の教会が何であるのか、どのようなものであるのかの絵を垣間見せるくれる。終わりの時—究極的には、言われたすべてが成就される時は、神の霊、神の命はすべての人のために存在する。すべての人間は神の子であり、それは私たちがお互いをどのように向き合うかを示唆している。愛と平和とDevonでの聖なる牧草地で経験した調和。努力もせずこのような牧歌的生活を過ごせる自分自身を、魔法のように見出だせない。しかし人生のすべての難題と艱難は、究極的現実（行き着くところの現実）として私たちの前に横たわっている。究極的現実（難題と艱難）に、神の霊の御力と御業を人々に遣わしていただく使命が私たちに与えられ、招かれている（強いられるかも知れない？）。その霊は、私たちの内に、私たちを通して、生きておられ、働らかれている。

（文責長澤猛）